

ゆとりの研究

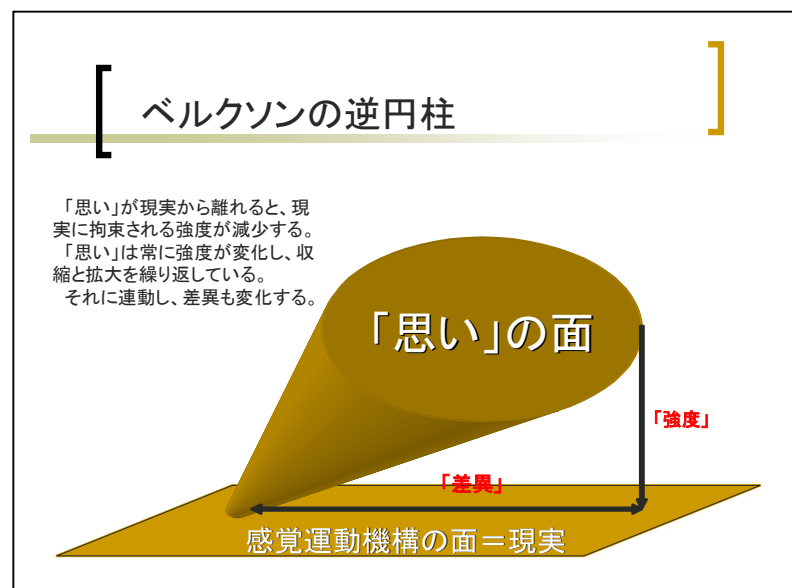
「ゆとり」を広辞苑で引くと、「ゆとり」の隣に「湯取り」があり、「ゆとり」の原義として取り上げられることがある。蓋のあるおひつや飯びつに目一杯飯を入れず、お櫃の中に空間を作ることにより、飯から出る湯気がお櫃の内壁に着き再び飯につくことなく、しばらくの間、炊きあげた状態で保存が出来るという。このように、全て利用可能な空間を使わず、使われない空間を残しておくことが食事をよりよく楽しむことが出来る工夫であろう。この使われない空間が湯取りであり、人生にこの空間を置き換えた時、「ゆとり」となるという。

話としては、おもしろいが、食事を取るという目的のために作られた「ゆとり」であり、効率性を考えた「ゆとり」であることから「ゆとり」の本質を示す例ではない。ピーパーは「余暇と祝祭」の序文で余暇に効用善を求めることを諫めている。彼によると余暇は労働の対立概念ではなく、並置概念であるという。余暇それ自体が人生の一部であり、労働生産性を向上させる道具ではない。「ゆとり」＝余暇ではないと考えるが、大きく重なり合っているところはある。「ゆとり」に効用善を求めない点では同様であると考えている。

ピーパーは、余暇の本質をコンTEMPLATO（観想）に求めている。ギリシャ哲学とキリスト教に立脚した論考の終着点である。コンTEMPLATOは魅力的な言葉であるが、あまりにも現実から遊離した印象を受け、レジャーを含めたゆとり研究の見地からは狭義ではないかと思われる。

ベルクソンは「物質と記憶」の中で、「思い出

と「感覚運動機構」からなる逆円錐を示している。「思い出」という記憶の動的な部分をコンTEMPLATO、「感覚運動機構」を現実と置き換えると、ピーパーのコンTEMPLATOに動的で柔軟な解釈を与える。逆円錐の底面積を「思い出」とし、「感覚運動機構」を現実平面としたとき、現実平面にそそり立つ思い出という逆円錐がそそり立つ。逆円錐の頂点は現実平面との接点であり、現実平面より離れれば離れるほどコンTEMPLATOは拡大する。現実平面からの距離はコンTEMPLATOの大きさと正の相関を示している。逆円錐はコンTEMPLATOの在りようにより拡大・縮小、ゆがみを生じ常に一定ではなく、バランスを



取るように動的であり、ホメオスターシスを図っているかのようである。ベルクソンは、逆円錐の底面積が拡大することを弛緩と、逆に縮小することを収縮と呼び、弛緩と収縮を「反復」するモデルを示している。反復により底面積は変化し、変化による底面積の差を「差異」と呼ぶ。

篠原は「ドゥルーズ」のなかで、「収縮の程度は、ベルクソン哲学において、緊張の程度に相応する。緊張の度合いは強度の度合いでもあり、緊張と弛緩とは強度の上昇と下降という正反対の動きに対応する」と述べている。ドゥルーズはベルクソンの「差異」に注目し、ベルクソンが「創造的進化」で示したエラン・ヴィタールを差異の分化として再規定した。これにより哲学的な観想の深さが余暇ではなく、観想の繰り返しによる自己内部における精神的異世界が現実生活との接点を持ちながら弛緩と収縮を反復する状態を「ゆとり」として理解することが出来る。すなわち、動的な収縮と弛緩の反復は多様な差異の存在を肯定し、この差異の大きさと変化が「ゆとり」に相当する。

ドゥルーズはガタリとの共著である「千のプラトー」で差異と反復による思考としてノマド的思考について述べている。ノマド的思考の背景には、二人の前著である「アンチ・オイディスプス」に示されたマシニズム（機械状論）が根底にある。これは目的論的生気論への対論である。そのマシニズムの延長上に社会機械論があり、それによると社会機械の要素として「欲望する生産」と「社会的生産」がある。それより成り立つ社会は、ドゥルーズとガタリは、交換によって成り立つのではなく、登録によって定義されるという。「欲望する生産」をコントロールするために、社会的生産を成り立たせるために、欲望の流れを登録する。すなわち、社会とは抑制により成り立っている。抑制のための登録では、流れのコード化により、抑制すべきものと社会的に利用すべきものに分類される。ところが社会機械の一つである資本主義機械においては、コード化がなされない、脱コード化された貨幣が社会の充実身体（社会機械における主体）となる。脱コード化により、登録されない欲望の流れは公理系により資本を拘束する。コード化は、コードされる欲望の流れの性質は変えないが、公理系は資本の性質については問わず、金額という抽象量に変換する。

このような社会機械下におけるヒトは、機械の構成物としてのみ評価されるが、自己においては社会機械以外の存在として評価する。すなわち、アナキーで異世界住民として。これは、現実社会からの遊離ではなく、現実社会との取引としての行為であり、これがノマド的思考である。

ノマド的思考、ノマドロジーは、遊牧的な自由の地、心のコモンズの中での観想であり、様々な差異がスキゾ的に存在する。これは構造の中で規定された行為ではなく、ヒトが主体となった世界、これがピーパーのコンテンプラチオを起点、ハイデガーの現存在を原理、ガダマーの地平の融合を戦略とした「ゆとり」仮説の枠組みである。

さて、「ゆとり」の概念化と構造化を企てるために関連用語の整理が必要であろう。ゆとり、余暇、あそび、レジャー、リゾート、休養、自由時間など関連するであろう用語は数多く在る。労働のように対置される用語も多数在る。対置される用語はそれぞれの用語が

取りざたされる分野を代表する言葉であり、必ずしも「ゆとり」に対置するものではないので、論考は避ける。

遊びについてはホイジンガのホモルーデンスが原典として取りざたされるが、これはホモファブリクス、すなわち、ホイジンガの時代に勃興しだした産業に対置する言葉であり、もし、現在対置させるならば、ホモエコノミクスが適当であろう。カイヨワの遊びの分類についても、遊びの特徴や要素など遊びの本質を示したのではなく、現象的に分類し、いくつかの遊びを比較することにより文化を検証したものである。自動車のハンドルの遊びを、「遊び」の事例として引用されることがある。しかし、これとても効用善のための遊びであり、遊び自身の本質を指し示すものではない。

遊びは、遊ぶ行為をしている者にとっては、遊びは見えず、行為が終われば、遊ぶ者はいなくなる。遊ぶ者をやめた後は遊ぶ者とは呼ばれないが、遊びの余韻は続く。

労働は、労働する者が労働を意識して初めて行為される。労働を意識して初めて労働が成り立ち、労働が終わっても労働者である。このように労働は社会的な価値であり、人間がコード化された結果である。しかし、遊びは極めて私的な行為で非社会的である。遊びの中には社会の縮図や学習するための道具として考えられることもあるが、遊びの一面だけで、総体は私的に脱コード化された行為である。すなわち、労働と遊びは対概念ではなく、並置概念である。

以上のことは、「ゆとり」と置き換えることが可能であろうか。置換可能で在れば、遊びはゆとりと同質となるが、「ゆとり」には、遊びの動的な部分だけではなく、より広い範囲を含んでいる。遊びは行為を指し示す言葉であり、「ゆとり」は行為だけではなくその環境をも含む。「ゆとり」は遊びのアフォーダンスを提供する上位概念として位置づけられる。

休養、癒し、リゾートも同様で行為や作用、空間を表し、「ゆとり」の下位概念であろう。すなわち、「ゆとり」の行為に遊びや休養が、「ゆとり」の作用に癒しが、「ゆとり」の空間にリゾートがある。

このように「ゆとり」には下位概念で支えられる構造がある。具体的には、空間、世代、交流の三要素から成り立つ。その三要素には、それぞれ共有（コモンズ）、役割、内的世界の三レベルがある。これらは全て「ゆとり」そのものを示しているものではなく、「ゆとり」を発見、開発、利用するための資産に他ならない。

自分で自由になる空間を多く持つことがゆとりとして認知される。自分の土地や部屋の広さはゆとりとして認知される。自分の土地ではなくとも、公的私的是問わず、広く目あたりの良い景観は、これもゆとりと認知される。公園や景観、公共施設や職場のフリースペースは自分のものでなくとも、ゆとりの作用である癒しが得られる。空間が空間として以外に利用されない、誰も我はいることの出来ない空間は共有地にならずゆとり資産ではない。よって、他者との共有化で自由である空間、すなわちコモンズが空間ゆとり資産である。共有化された空間は景観として存在する場合、内的世界へ投影され「ゆとり」とし

て認知される。

沖縄地域の芸能をプロデュースする藤木勇人は、地域の文化的資産として世代間の交流を挙げ、時間的ゆとりを拡張した文化的ゆとりを主張した。時間的ゆとりは、実は物理的な時間のゆとりではなく、それぞれの過去から現在に至るまでの地平融合を繰り返した結果得られた文化的・生物学的時間から得られたゆとりである。世代間で共有した時間経験が世代的ゆとりとなる。世代間にはそれぞれ親や子、兄弟、仲間という近い関係から、祖父、祖母、曾祖父、曾祖母、死者、先祖などとの関係からそれぞれの役割が与えられる。その役割や共有とともに、思い出や将来の夢、過去・未来など内的世界があり、これらが世代ゆとり資産である。

トマス・モアが描いたユートピアはエリートが支配する効率的社会を理想郷としたゲゼルシャフト的社会であった。東洋の桃源郷思想では、各世代が共存し、大雑把なゲマインシャフト的社会が描かれている。

クーンのパラダイム、革命的発見が新たなパラダイムを生む。しかし、ガダマーの地平の融合では、他の地平との接近・融合により新たな地平が生まれるという。地平には先入見、歴史性があり、これらが新たな地平との融合の中で作用史へと転換されていく。新たな地平は新たなきまりがあり、過去のきまりとは断絶しているように見えるが作用史による継続がある。ベルグソン哲学における持続がここにある。

生産的活動と非生産的活動を分類すると下記の五群に分けられると思う。非生産的活動は消費活動とイコールではない。生活者の目線での言葉の分類である。それぞれの言葉が生活的価値観として同値におかれているコトを表現する言葉群として分類した。たとえば仕事と労働は同値ではない。労働は作業・課題と同値であろう。仕事は人生と価値が大きく重なっている。

キーワード群

- 1 群 ゆとり、余暇、自由時間、遊び、レジャー、余裕、リラックス、
- 2 群 芸術およびその鑑賞（観劇、読書、鑑賞）
- 3 群 ダンス、踊り、お祭り、旅行、ガーデニング、つり、ゲーム
- 4 群 スポーツ実践及び観戦
- 5 群 時間、空間、生活力、雅（みやび）